



# 東電の嘘 危険なトリチウムを 海に流すな

多くの反証があるにも関わらず、東京電力はそれには一切答えることなく、福島第一原子力発電所汚染水の海洋への放出を強行する計画です。汚染を拡大させるだけの嘘で塗り固められた海洋放出を許すことはできません。

## 東電3つの大罪

- ①トリチウムの特異性と危険性の隠蔽
- ②内部被曝と外部被曝を意図的に混同
- ③貯蔵タンク建設の可能敷地の虚偽

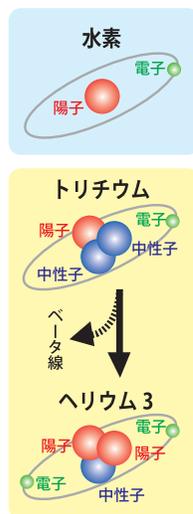
これらは1つだけでも問題ですが、それが3つも重なったとなると大罪です。

どうしてこのような嘘を突き通してまで、海洋放出に固執する必要があるのか。東電と政府(経済産業省)の意図が理解できません。

## 変幻自在なトリチウム

汚染水の主役となるトリチウム(三重水素)は、通常1個の陽子で構成される水素原子核に中性子2個が加わったもので、弱いβ(ベータ)線を出しながらヘリウム3に変ります。

化学的性質が水素と同じことから、自然界ではその多くが水の形で存在しており、水のためALPS(多核種除去設備)でも取り除くことがで



きず、汚染水として貯蔵タンクに保存されています。

また、水なので、固体、液体、気体と自由に姿を変えて地球上に拡散してしまいます。

海洋に放出した場合には、魚介類の体内に取り込まれるだけでなく、水蒸気として空気中に浮遊して移動するとともに雨水となって広範囲に降り注ぐことになります。

東電は放射線濃度を規制基準内に薄めて海に流すので問題ないと説明しますが、重要なのは薄めて放出しても、トリチウムの絶対量は変わらないということです。

自由に形態を変えられるトリチウムの変幻自在性を考えれば大事なのは放出量です。

## 沈黙の殺人鬼

トリチウムの危険性は、放射線が細胞の遺伝子(DNA)を傷つけるだけでなく、水素同位体として遺伝子そのものの構成元素にもなってしまいます(遺伝子の4塩基をつなげているのは水素結合)。

その場合、β線を放出するヘリウム変換では、遺伝子自身が崩壊、損傷してしまいます。

遺伝子は外部から受けた放射線の傷は治せますが、自己崩壊した傷を治すことはできません。

発ガン性が高まるだけでなく、生殖細胞の遺伝子損傷は子孫へと受け継がれていきます。

トリチウムは、素知らぬ顔をして静かに近づいて取り付き、徐々に体をむしばむ「沈黙の殺人鬼」なのです。

## 怖ろしい内部被曝

東電と原子力関係者は、トリチウムは自然界にも存在し、原発から40年以上放出し続けているものの、放射線も極めて弱く、人体への影響は見られないと強弁しています。

しかし、これは外部被曝と内部被曝を完全に混同した議論です。

内部被曝による極微量放射能が人体に与える影響については、チェルノブイリ汚染地で、食品と暮らしの安全基金が続けている「日本プロジェクト」の実態調査でも明らかになっています(詳細は3.11別冊『食品汚染を減らして実証・極微量放射能の危険』参照)。

妊婦へのエックス線検査禁止を訴えた英国のアリス・スチュアート博士(1906年～2002年)が「ピンポイント放射線」と呼んだように、至近距離から直接遺伝子を傷つける内部被曝に放射線の強弱は関係ありません。

特に脂肪や蛋白質などと結合した有期結合型トリチウムは、体内に長く留まるため影響は大きく、米国では原発稼働地域と乳ガン罹患率の相関性が実証されており、日本でも原発に近い地域での白血病やガン死亡者数の増加が報告されています。

## 余裕のあるタンク建造用地

2021年2月18日現在、福島第一原発の敷地内には、1061基のタンクに124万6960m<sup>3</sup>の汚染水が貯蔵されています。

東電では、昨年末に完成した約137万m<sup>3</sup>のタンクが満杯になる2022年夏には、もはや敷地

## ガンの放射線治療の権威・西尾正道医師 軽視される原発事故の被害

トリチウムの人体影響、内部被曝の恐ろしさについて、隠蔽され続けている真実を明らかにした本著。インフォデミックとは「偽情報の拡散」という意味です。正しい知識を得るためにぜひ、ご一読を。

- ◆価格：1100円+税(寿郎社)
- ◆ご購入は書店で



がないことから、汚染水の海洋放出をせざるを得ないと主張し続けています。

しかし、ジャーナリストの木野龍逸氏の試算によると、ボルトで止めたフランジ型タンクから漏えいリスクの低い溶接型タンクへの切り替え作業で解体されたフランジ型タンクの跡地(Eエリア：49基、Cエリア：13基、G5エリア：17基、H9エリア：12基の合計91基)に、そのまま溶接タンクを建造するだけで、東電の公言している貯蔵期限を、2024年秋へと2年以上延ばすことが可能です。

さらに、廃炉となった福島第二原発の広大な敷地を加えれば貯蔵用地が不足することはありません。

なぜこの事実を東電は隠しているのか。極めて不誠実です。

貯蔵敷地があるのですから、半減期12.3年のトリチウムが無害化する100年間、汚染水は廃炉作業を続ける原発敷地内に保管するのが最善の策です。

いま自然界にあるトリチウムの99%は1950年以降の原爆実験と原発によって放出されたものです。稼働中の原発からは、現在も大量のトリチウムが放出され続けています。

福島だけでなく、これらの汚染水を止めない限り、トリチウムの放射線被害は拡散し続けます。 小沼紀雄(文筆家)